

(ハーベスト社, 2009 年, A5 判, 265 頁, 2,835 円)

(中央大学文学部ほか非常勤講師)

また、「性別を見る仕方」の峻別は、「望む性別」で相互行為に参入しようとする人々が悩まされる困難の発生を説明する。たとえば、第3章では、「一瞥による判断」に十分に耐えうる MtF (Male to Female: 男性から女性へと性別を変えた／変えようとする人) が、それにもかかわらず「女らしさ」を果てしなく追求してしまうというフラストレーションが示される。第5章では、性同一性障害の診断場面において「心の性」を「見せなければならぬ」患者と、それを「見なければならぬ」医療者がともに抱え込むジレンマが示される。いずれの困難も、「望まない性別」を知っている者であれば「望まない性別」の手がかりを無限に探し出せることによって、論理的に生じる困難であると看破される。

さらに、第4章は、相互行為における性別カテゴリーの特異性を論じるが、それも、性別を判断する場面を2つに分解することで見えてくることである。その特異性を明示することにより、相互行為分析の方法論をめぐる論争に一定の回答を与えるのもおもしろい。

以上のように、「性別を見る仕方」の分解は、いくつもの問いを解くための有効な補助線となるものである。それは「一瞥による判断」を発掘したことの利得の大きさを示すものだが、そのためか「性別を見る実践」に関する前半部分(第1～5章)は、前後の接続に苦心したあとが見られる。他方、後半の第6～8章は「見る実践」の話ではないが、連続した話としても、性同一性障害のエスノグラフィとしても読みやすい。

後半は、「正当な当事者とは誰か」に関するカテゴリー化実践を取り上げている。「性同一性障害」は疾患名であり、したがって「ある人が性同一性障害であるか否か」を判断する権限は本来、医療者だけがもつ。しかし、当事者の間でも「性同一性障害として認められるのにふさわしいのはどんな人か」について論争がある。ブログなどのやりとりを通じて「本物は誰か」を見分けるためのコミュニティ特有の基準が作られ、共有されている。

本書では、当事者へのインタビューを分析し、「真の」性同一性障害(第6章)／MtF(第7章)／FtM(第8章)であるための基準を析出している。当事者が用いる基準は、医療者の基準を追認し、加えて「人としてのモラル」「社会性」「成熟度」などを身につけた道徳的な存在であることまで求めていること、そのため、当事者による「カテゴリーの自己執行」(H. Sacks)は、医療者による「他者執行」の優先性や支配的な性別規範を揺るがす「革命的な」効果をもちえないこと、などが論じられる。

本書は、長年のフィールドワークを独自の視点で分析したエスノグラフィであるが、「性現象の社会学」という研究分野が取り組める対象を開拓した点も高く評価されてよい。著者は終章において、自らの研究課題を、「女／男であること」と「女／男らしくあろうとすること」がどのように関連しているのかを明らかにすることだと述べている。とすれば、トランスジェンダーの人々が「らしさ」に固執するしくみにとどまらず、性別違和のない女／男が「女／男らしくあろうとする」し

くみにどこまで迫れるかが今後の課題になってくるだろう。これからも著者の研究に注目していきたい。